はぐくむ

共働き育児支援 亡父に絵本で感謝

ノーベル賞・大隅さんの妻 萬里子さんが出版

共働きの子育てを支えた父に、感謝を伝えたい。そんな思いを込めた絵本「じいちゃんじてんしゃしゅっぱつしんこう」（さいはて社）が、昨秋出版された。著者の大隅萬里子さん(74)は、ノーベル医学生理学賞受賞者の大隅良典・東京工業大栄誉教授の妻。自身も生命科学の研究者で、両親の協力を得ながら2人の子を育てた。

父の中澤壽三郎さんと、大隅さんの長男と次男 ＝大隅さん提供

じいちゃんの自転車の後ろに乗って、ともくんは山の上の保育園に通っている。坂道の途中のいちようの木を「じまんのともだち」と教えてくれたじいちゃん。ところがじいちゃんは、具合が悪くなって入院することになり……。

じいちゃんとの別れ、ともくんの成長、いちょうを通じた季節の移り変わりがつづられている。絵は永山健一郎さん。歌人で細胞生物学者の永田和宏さんは「言葉のそれぞれがしんと静かで、木洩れ日のような暖かさに満ちています」との言葉を巻末に寄せた。

研究職との両立 注がれた愛情

大隅萬里子さん。絵本は「五足萬（ごたりまん）」の筆名で書いている

絵本に書いたのは、長男が8歳、次男（ともくん）が3歳ごろのこと。朝早く家を出る萬里子さんに代わり、父の中澤壽三郎さんが次男を保育園に送ってくれた。

萬里子さんは大学院在籍中に学生結婚し、1972年の長男誕生を機に民間の研究所に就職。その後、夫の留学に伴って渡米し、同じ大学で仕事を続けながら77年に次男を産んだ。帰国後は東京都内の実家の隣に住み、博士号をとって新たな職場で働き始めた。子育てと仕事に追われ、「勉強の時間もとれず、仕事も中途半端という悩みがずっとありました」。

葛藤の日々を支えてくれたのが両親だった。慌ただしい毎日を送る萬里子さんたちを見守り、2人の孫たちに愛情をかけてくれた。

しかし、壽三郎さんは心臓発作を起こし、4年後の85年に76歳で他界。「自転車での送り迎えが心臓の負担になったのではないか」という思いを持ち続けていた。

小さいころから無口で、親とじっくり語り合う機会もないままだった。6年前に母の智枝子さんが亡くなり、両親への思いを形にしようと、母にまつわる絵本を4年前に出版。そして今回の絵本に、父への感謝を込めた。「コロナ禍で離れた家族となかなか会えない状況ですが、思いを聞き、思いを伝えることは、いかに大事なことかと思います。ぜひその時間を大切にしてほしい」 （松本紗知）

ことば

四角形

「角帽」「博士帽」などと呼ばれるもので、ゆったりとしたガウンと一緒に身につけることが多い。四角形の角は、四つの学問を表すという説もあるよ。

4036

◆記事への感想や体験をメール（seikatsu@asahi.com）でお寄せください。